

ダニ研究

— PDF 配信版 —

寄稿（提言、総論、小論、随想、紀行）

伊東拓也：北海道のシュルツェマダニ *Ixodes persulcatus* の生息地と記録地
..... 3

高橋 守・三角仁子・角坂照貴：ツツガムシの刺し様を見る（編集部企画）... 9

会報

日本衛生動物学会ダニ類研究班第33回集会の記録 14

第25回 SADI 伊勢・南伊勢大会プログラム 15

第24回リケッチア研究会2017年度プログラム 20

第10回日本リケッチア症臨床研究会2017年度プログラム 21

編集後記

第13号（2018年6月）



上高地（標高 1500m）の春、穂高連峰岳沢を望む（高田撮影）

この10年間でもシュルツェマダニの生息域が何となく高みにシフトしつつあるよう、
またツツガムシ類の南限も北上ぎみに感じられるのは、気のせいだろうか？

他方、小氷期に入る可能性なども囁かれており、温暖化と寒冷化は輻輳している？

研究総論

北海道のシュルツェマダニ *Ixodes persulcatus* の生息地と記録地

伊東拓也（北海道立衛生研究所）

シュルツェマダニは、およそ北緯 50 度を中心に東ヨーロッパから極東までユーラシア大陸の寒帯及び亜寒帯を帯状に横切る形で分布しており、ほかにチベットを含む中国・朝鮮半島・日本、台湾高地などに隔離された分布地がある(Uspensky, I. 2016). 日本では、北海道中部以北と本州中部に比較的広く分布するが、北海道南部を含む九州まで、高標高地に飛び離れた記録が点在する (Yamaguchi, N. *et al.* 1971, Takada, N. *et al.* 1994, Takada, N. *et al.* 2001) これらの隔離的な分布は、氷河期の遺存であるとされているほか、本種の特に幼若虫が鳥類を吸血することから、鳥によって運ばれたり交流したりしていると考えられている。

一方、本種の記録をより微視的にとらえると、北海道内においても生息地とは考えにくい場所においても採集されることがある。シュルツェマダニの生息・分布・拡散を把握することは、本種及び媒介感染症対策の基礎データとして重要であると考えられる。そこで今回は、このテーマについて衛生動物学的観点から少し考察したい。

私見で恐縮だが、シュルツェマダニとその宿主動物を調査していてマダニが「生息している」と実感できるのは、

1. たくさん採れる (感覚的には、ネル旗ずりしながら 1km 歩いて 10 個体以上).
2. 毎シーズン、採れる.
3. そこに生息する動物 (ヒト・家畜・ペットも含む) から吸血している.

というデータが得られたときである。これらは他の種のマダニにも言えることであろう。ところが、シュルツェマダニでは、生活環が成り立っているとは考えにくい場所における採集例が散見される。すなわち、

1. 標本や採集記録はあるが、採れた場所にはエサ (吸血源となる動物) があるとは思えない.
2. 標本を入手したので、その場所へ採集調査に入ったが、採れなかった.
3. 数年間にわたり調査するのに数個体しか採れなかった.

という場所である。つまり、シュルツエマダニはエサが無いから、個体密度が低すぎて生活環が維持できないと思われる場所でも採れることがあるということである。これら3つのパターンの例を示す前に、生息地（＝生活環が成立している場所）である札幌市近郊のデータを紹介します。



図 1. 宿主に乗り移るため植生上で待機するシュルツエマダニのメス（矢印）、他はヤマトマダニ。千歳市

札幌市近郊のデータを紹介します。札幌市郊外及び近郊地域の落葉広葉樹林下の林道では、例年5月中・下旬の旗ざり法でおよそ10個体/km程度のシュルツエマダニ成虫が採集され、中には100個体/km以上採れる場所もある。このような場所では、比較

表 1. 札幌市近郊の鳥の標識調査で得られたマダニ類(2013年10月)

鳥種	個体数	<i>I. persulcatus</i>		<i>I. pavlovskyi</i>		<i>I. columnae</i>		<i>I. tanuki</i>	<i>H. flava</i>
		若虫	幼虫	若虫	幼虫	若虫	幼虫	若虫	若虫
アオジ	22	4	7	1	3	3	10		
ノゴマ	3	1	2						
アカハラ	1	1							
クロジ	1		1						
ウグイス	1	1							
シジュウカラ	1					1			
ミヤマホオジロ	1								1

マダニは、左からシュルツエマダニ、パブロフスキーマダニ、ハシブトマダニ、タヌキマダニ、キチマダニ。北海道環境科学研究センター 玉田克巳氏採集

的容易に植生上での待機行動（図 1）を観察できるし、少数ながら幼虫及び若虫も旗ずり法で採集される。また、シュルツェマダニの幼虫及び若虫は札幌市近郊でも鳥に寄生している（表 1）。野ねずみ類については札幌市近郊では継続的調査を行っていないが、他地域の調査ではアカネズミ、タイリクヤチネズミ、ヒメネズミに幼虫・若虫が寄生しているので、札幌市近郊でも同様の状況にあると考えられる。ヒトやペットでも多くの刺咬例を経験している（表 2）。以上のように、生活環が成立している“生息地”では、植生上でまとまった数が採集されることに加えて、各宿主動物からは動物種に応じた発育ステージが採集される。

表 2. 札幌市内のイヌ・ネコ・ヒトにおけるマダニ刺咬例の原因種（2013-2017 年）

動物	個体数	<i>I. persulcatus</i>			<i>I. pavlovskyi</i>		<i>I. ovatus</i>	<i>I. tanuki</i>		<i>H. flava</i>		<i>H. japonica</i>	
		♂	♀	若虫	♂	♀	♀	♀	♂	♀	♀	若虫	
イヌ	146	1	34	1			83	41	1	9	2		
ネコ	7		1				3	5					
ヒト	17		7		1	1	6						2

マダニは、表 1 から新たに *I. ovatus* ヤマトマダニ、*H. japonica* ヤマトチマダニ

生息地ではないと思われる場所における採集例として、最初に市内の公園での刺咬例を挙げたい。札幌市でも都市部の商業地や住宅地に点在する小さな公園には、シュルツェマダニの待機場所となり得る植生がなく、野ネズミなどの動物も生息していない。このような公園の一つで隣接する幼稚園の園児がシュルツェマダニのメス成虫に刺咬された。そこはシンジュの植栽とネグンドカエデ等の生け垣が主な植生で、最も近くの広葉樹林とは 400m ほど離れ、途中は住宅地と交通量の多い道路もある。

次の例として、標本を入手したので再調査に入ったが採れなかった、焼尻島のデータを示す。2011 年 6 月と 7 月にシュルツェマダニのメスが、10 月にはタヌキマダニのメスがいずれもネコから採れたとして留萌地方の焼尻島から送られてきた。そこで、翌 2012 年秋に植生（旗ずり法）及びネズミ類（箱わな 100 個・一晚）上のマダニ、特にシュルツェマダニの幼・若虫を目的として 4 名で調査した（図 2）。その結果、ネズミ類はタイリクヤチネズミ 15 個体を得たがマダニ類は寄生しておらず、旗ずり法

でもキチマダニの若虫 1 個体のみで、シュルツェマダニは得られなかった。

最後に、ダニ媒介脳炎発生地での採集データを示す。調査地は、北斗市（当時は上磯町）の西部の海岸段丘上の沢や牧草地 k

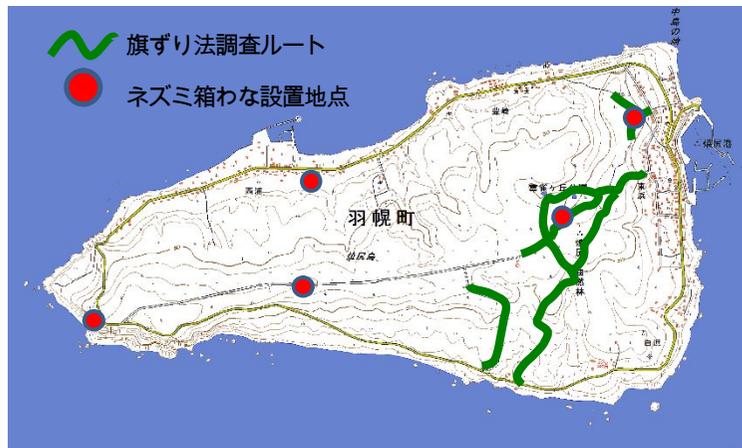


図 2. 焼尻島におけるマダニ調査 (国土地理院電子地図を使用)

間の林床ササ植生に沿った約 7km で、1995 年から 2 年間、4 月から 10 月まで毎月植生上とネズミ類のマダニを調査した。その結果、シュルツェマダニは植生上から各年雌雄 1 個体ずつが採集されている (表 3)。これらは、それぞれ別の調査日に別の沢で採集され、幼・若虫は採集されていない。これは、成虫が植生上から幼・若虫がネズミ類から多数採集されているヤマトマダニとは対照的であり、シュルツェマダニは偶発的に採集されたと考えられた。一方、ここから北に約 25km にある木地挽高原の標高 500m 地点 (図 3) では、2013 年 5 月にシュルツェマダニのオス 3 個体、メス 1 個体がネル旗ざり約 0.5km で得られ、さらに 2018 年 5 月に再訪した際に同地点でメス 5 個体が得られており、ここは安定的な生息地であると思われる。

以上のように、生息地ではないと思われる場所でも採集されるのは成虫ばかりで、

表 3. 北斗市西部のマダニ採集結果 (1995–1996 年)

採集法	採集年	<i>I. persulcatus</i>		<i>I. ovatus</i>		<i>I. tanuki</i>		<i>H. flava</i>				
		♂	♀	♂	♀	若虫	幼虫	♂	♀	若虫	幼虫	♀
植生	1995	1	1	403	436			4				2
	1996	1	1	524	648	1		4	3			1
ネズミ	1995					35	11			55	242	
	1996					8	4			84	158	

そのような場所では幼・若虫の宿主である野ネズミがいないか、いても野ネズミや植生から幼・若虫が得られない。このことは、シュルツェマダニの生息地内で宿主動物に寄生した幼虫や若虫が、その動物が生息地外に移動した際に



図 3. シュルツェマダニ生息地と思われる木地挽高原

飽血・落下・脱皮して若虫や成虫となり、それらが植生上や再び吸血したヒトや動物から採集されたと考えると矛盾がない。では、どのような動物であろうか？もし成虫の宿主となるような中・大型ほ乳動物であれば、飽血落下した成虫が産卵し、幼虫が野ネズミなどから採れるはずである。しかし、今のところ非生息地と思われる場所では、シュルツェマダニの幼虫は野ネズミから採れていない。したがって、やはり鳥類が妥当であろう。そうすると、札幌市近郊の鳥に寄生していたタヌキマダニとキチマダニ（表 1）が焼尻島でそれぞれ 1 個体ずつ採れたこと、逆に鳥に寄生していないヤマトマダニは今のところ利尻・礼文・焼尻の各離島では採れていないことも説明できる。これらのことから、衛生動物学上重要な視点として、

- ・シュルツェマダニは、生息地以外の場所、特にマダニが生息するとは思えない都市の公園や離島にも偶発的に存在することがある。
- ・偶発例は、生息地で鳥に寄生したシュルツェマダニの幼若虫が生息地外に運ばれたことによると考えられる。
- ・シュルツェマダニによる刺咬症やライム病・回帰熱などの同マダニ媒介性感染症が市街地などより広域に発生する可能性を考慮した対策が必要である。

さらに、Moskivitina, N. S. *et al.* 2014 は、運搬役である鳥そのものがシュルツェマダニが媒介する主要な感染症の病原体を保有していることを明らかにしており、感

感染症流行地における陸上宿主動物を主体とした動物疫学の見直しが必要となるかも知れない。このような観点から、今後も各種マダニの刺咬事例を収集し、疫学調査を行ってマダニ生活環などを把握し、マダニ媒介感染症との結びつきやリスク解析を丹念に行っていく必要があると考える。

引用文献

- Uspensky, I. 2016. The Taiga Tick *Ixodes Persulcatus* (Acari: Ixodidae), the Main Vector of *Borrelia Burgdorferi Sensu Lato* in Eurasia. SMGroup ebook. www.smgebooks.com よりダウンロード(2018年6月8日).
- Yamaguchi, N. *et al.* 1971. Ticks of Japan, Korea, and the Ryukyu Islands. Brigham Young University Science Bulletin. 15(1), 142-147 & 212-214
- Takada, N. *et al.* 1994. Prevalence of Lyme *Borrelia* in Ticks, Especially *Ixodes persulcatus*, (Acari: Ixodidae) in Central and Western Japan. Journal of Medical Entomology 31(3), 474-478.
- Takada, N. *et al.* 2001. Prevalence of Lyme Disease *Borrelia* in Ticks and Rodents in Northern Kyushu, Japan. Medical Entomology and Zoology 52(2), 117-123.
- Moskivitina, N. S. *et al.* 2014. The Role of Birds in the Maintenance of Tick-Born Infections in the Tomsk Anthropurgic Foci. (Translated.) Biology Bulletin 41(4), 387-393.

本稿は第70回衛生動物学会大会ダニ研究班集会にて話題提供させていただいた内容を再構成したものである。

研究紹介（編集部企画）

最近、媒介感染症の問題からマダニ類に刺されることが怖いという観念が広がっているようで、実際にマダニ類は視認できる大きさなので嫌悪感ひとしおだろう。対して、ツツガムシ類は恙虫病の媒介がよく知られるものの、虫体はとにかく人間の眼の分解能ぎりぎりなので見た目の嫌悪感などとは無縁で、ムシが自分の手足に付いているか否かはざっと見るのはもちろん目を凝らしたところで気付き難い。そういうこともあって、どういうツツガムシが、どのように吸着して、血ではない組織液を吸うものか（その間に唾液を介して *Orientia tsutsugamushi* を媒介）、いわば感染の門戸について一目でも見たいと思う方は少なくないだろう。

そこで今回は、ツツガムシ専門の研究者から画像の提供を受け、その中から骨子となる像を抽出して適宜に構成してツツガムシの刺し様を供覧する（高田）。

ツツガムシの刺し様を見る

高橋 守・三角仁子（埼玉医大）、角坂照貴（愛知医大）

まず、わが国でヒトを刺したことの知られるものは現在のところ 13 種である。

- ・アカツツガムシ *Leptotrombidium akamushi*
- ・タテツツガムシ *L. scutellare*
- ・フトゲツツガムシ *L. pallidum*
- ・デリーツツガムシ *L. deliense*
- ・バーンズツツガムシ *L. burnsi*
- ・ヒゲツツガムシ *L. palpale*
- ・フジツツガムシ *L. fuji*
- ・アラトツツガムシ *L. intermedium*
- ・キタサトツツガムシ *L. kitasatoi*
- ・サダスクガーリエップツツガムシ *Gahrliepia sadusuki*
- ・ナンヨウツツガムシ *Eutrombicula wichmanni*
- ・ナガヨツツガムシ *Neotrombicula nagayoi*
- ・カケロマタマツツガムシ *Shoengastia hanmyaensis*

以下、刺し様の画像を眺めるが、すべては動物に寄生吸着する幼虫期のものである。



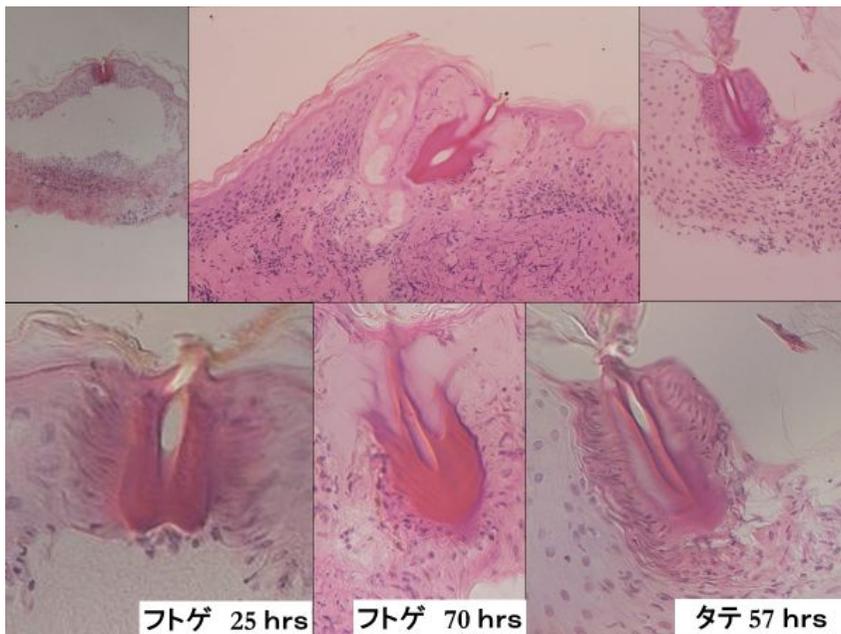
例としてアカツツガムシを 10 円硬貨に乗せて虫体の小ささを示す。



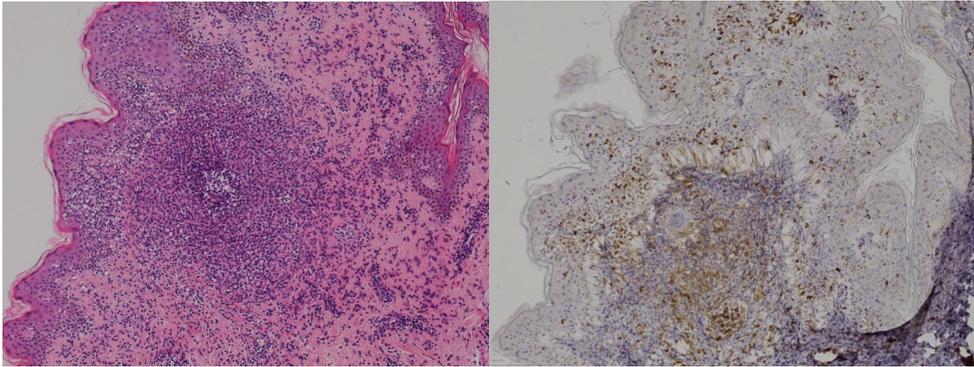
皮膚に吸着して1日後のアカツツガムシの様子。



名のごとく毛が太いフトゲツツガムシ、吸着してから2～3日目の様子（アレルギー体質でできた水泡の上部に吸着个体が見える珍しい例）



口器先端の挟角で咬んで刺し込み、唾液でストロー様の吸着管 *stylostome* を穿って組織液を吸飲するが、全体はおよそ表皮の深さにとどまる。



アカツツガムシに刺されて約 35 時間後の例では、宿主側の細胞層を利用して形成される stylostome 周囲の炎症性反応の細胞構成としてはヘルパ - T 細胞が主体で、他の関係細胞は散在しないし周囲を囲む程度であった。



よく刺して強い痒みを起こすナンヨウツツガムシ、刺されて 2～3 日後の刺し口であるが、本種は病原体媒介はない。



たまたま見つかったアラトツツガムシの刺症例であるが、実験的に吸着度をみた場合もその率は低いことを証明できた。



フトゲツツガムシに吸着され病原体感染が起こった場合の刺し口の変化、初期は小潰瘍、一般に10日前後を過ぎて患者が受診する頃の刺し口は黒い痂皮を被るが、半月～1カ月内に剥離する。

会 報

2018 年度 第 33 回ダニ類研究班集会（案内）

1. 日 時 5 月 11 日（金）13:00 以降～16:00 までの時間帯
2. 会 場 とかちプラザ会議室
3. 話題「シュルツェマダニを考える」

北海道と言えばシュルツェマダニでしょう。世界的に有名、実際にも咬着例が多く、病原体媒介に深くかかわる種です。ここでは本種を中心に 3 つの話題を提供いただき、考えてみることにしましょう。

1. マダニ類はどう咬着する？

高田伸弘（福井大学医学部）

2. マダニの皮膚科—咬着例の紹介から—

白戸貴久（帯広厚生病院）

3. 北海道のシュルツェマダニ，その生息地と記録地

伊東拓也（北海道衛生研究所）

4. 全体会議

2018 年度の活動方針について、SADI やリケッチア関連集会を見据えて

世話人 高田伸弘、矢野康弘（福井大学医学部）

acaritakada@rice.ocn.ne.jp（常用）

リンク会報1

第25回 ダニと疾患のインターフェースに関するセミナー

2017伊勢・南伊勢大会

(25th Seminar on Acari-Diseases Interface 2016 in Ise・Minamiise)

ホスト 坂部茂俊 (伊勢赤十字病院 感染症内科・循環器内科)

会期 2017年6月9日(金)～6月11日(日)

会場 6月9日:伊勢赤十字病院 1F多目的ホール「やまだ」(三重県伊勢市)

6月10、11日:海ぼうず(三重県度会郡南伊勢町相賀浦)

事務局 伊勢赤十字病院 事務部企画課

プログラム

【1日目 6月9日(土)】

開会の挨拶 伊勢赤十字病院 院長 楠田 司

1. 島根県における日本紅斑熱及びSFTS患者発生地域とマダニ採取状況について

○藤澤 直輝 (島根県保健環境科学研究所ウイルス科研究員)

2. 病理標本にみるダニの姿

○堤 寛 (はるひ呼吸器病院病理診断科(病理部長))

3. キチマダニ由来の新種ウイルスの解析

○木田 浩司 (岡山県環境保健センター)

4. 日本産ズツキダニ類を求めて

○高田 渉 (NPO 静岡県自然史博物館ネットワーク)

5. カベアナタカラダニの系統地理学的研究-予報-

○島野 智之, 蛭田 眞平, 芝 実 (法政大学)

6. 保護された野生動物等のダニ媒介性感染症に関する調査

○壁谷 昌彦 (福島県野生生物共生センター)

7. 長崎県のイノシシにおけるマダニ媒介ウイルスの血清疫学調査

○早坂 大輔 (長崎大学熱帯医学研究所ウイルス学分野)

8. マダニ体内における病原体の存在様式から感染時期を推察する

○矢野 泰弘 (福井大学)

9. 和歌山県古座川町のアワコダニ-紅斑熱群リケッチアとの関連-

○藤田 信子 (アカリ研), 森田 裕司, 森田 貴久子 (古座川町国保 明神診療所), 藤田博己 (アカリ研, 静岡県立大学)

特別講演 1 座長 馬場 俊一 (ばば皮ふ科医院)

10. スピロヘータから垣間見たやぶにらみの医学史秋田県における夏季のつつが虫病発生状況

○柳原 保武 (元静岡県立大学)

【2日目 6月10日(土)】

11. 適切な抗生剤治療にもかかわらず中枢神経障害を生じ、血小板減少が遷延した日本紅斑熱の2例

○古崎 陽一 (伊勢赤十字病院)

12. 日本紅斑熱とツツガムシ病の疫学的・臨床的な比較

○山藤 栄一郎 (長崎大学熱帯医学研究所臨床感染症学分野)

13. 当院で経験した比較的稀なダニ媒介感染症の2例

○中川 十夢 (町立南伊勢病院)

14. SFTS 症例による体液曝露事故時のヒト-ヒト感染リスクの可能性

○田中 宏幸 (伊勢赤十字病院)

15. 意識障害をきたした重症熱性血小板減少症候群の2例

○川浪 翔大 (紀南病院・和歌山県)

地元紹介 座長 坂部 茂俊

16. 相賀浦の近代史

○田中 保廣 (相賀浦区長・元外国船船長)

17. 北ベトナムの三次医療機関におけるツツガムシ病入院症例の病原体遺伝子および血清学的検査結果の検討

○加藤 隼悟 (長崎大学熱帯医学研究所臨床感染症学分野 (熱研内科))

18. 大分県におけるマダニ媒介感染症発生状況及び病原体検索

○加藤 聖紀 (大分県衛生環境研究センター)

19. 2016年度福島県におけるマダニの病原体保有調査

○鈴木 理恵 (福島県衛生研究所)

20. 酪農学園大学野生動物医学センターでの外部寄生虫症例概要

○浅川満彦 (酪農学園大学 獣医学群)

21. マダニとアレルギー（牛肉と魚卵）
○和田 康夫（赤穂市民病院皮膚科）
22. 神奈川県におけるマダニ類のアライグマ体表上の咬着の分布
○土井 寛大，加藤 卓也，羽山 伸一（日本獣医生命科学大学）
23. 日本紅斑熱発病者とマダニ刺傷者の刺傷日における気象条件の比較
○和田 正文（上天草市立上天草総合病院診療部長兼内科部長）
24. 2015年、2016年の大分県のマダニ刺症
○安西 三郎（安西皮膚科）
25. 日本紅斑熱とSFTSの血液学的比較
○宮崎 悠（伊勢赤十字病院）
26. ダニ類媒介感染症（つつが虫病，日本紅斑熱及びSFTS）の検査診断における鑑別検査の重要性について－広島県の検査実績から－
○島津 幸枝，谷澤 由枝，池田 周平，高尾 信一（広島県立総合技術研究所保健環境センター）
27. ダニ媒介感染症における治療の文献的考察
○重見 博子（福井大学医学部）
特別講演2 座長 宮崎光一（町立南伊勢病院院長）
28. 「知ることがあなたを守る」
○馬原 文彦（馬原医院）
シンポジウム1 獣害とマダニ被害の関係
コメンテーター 田原 研司・小林 秀司・高田 伸弘
29. 日本各地で増殖するニホンジカ社会の変容がもたらしたもの－
○小林 秀司（岡山理科大学）
30. 南伊勢町鳥獣被害防止対策実施隊の取組みについて
○森本 富由季（南伊勢町水産農林課）
31. 私と獣
○谷崎 克与（南伊勢町猟友会）
32. 三重県におけるダニ媒介性感染症発生状況
○赤地 重宏（三重県保健環境研究所）
33. 伊勢保健所管内における日本紅斑熱の広がり

○鈴木 まき (伊勢保健所・所長)

34. 鳥羽市の有人離島に発生した日本紅斑熱—イノシシ定住との関係

○石原 裕己 (伊勢赤十字病院)

35. 島根半島弥山山地における日本紅斑熱の発生とシカの生息数との関連性+ジビエ
肉に潜む病原微生物

○田原 研司 (島根県保健環境科学研究所)

36. ダニ媒介感染症増加の要因を考える

○高田 伸弘 (福井大学医学部)

特別講演 3 座長 山添 尚久 (町立南伊勢病院副院長)

37. 「マダニ刺症の予防対策」

○夏秋 優 (兵庫医科大学 皮膚科)

38. 追加・屋外殺虫の限定的効果について

○高田 伸弘 (福井大学医学部)

実習① i 捕獲された動物のマダニ調査

ガイド：矢野泰弘

ii マダニ採集ツアー①

ガイド：藤田博己

情報交換会 (会場：海ぼうず1階および屋外) 18:30～

【3日目 6月11日(日)】

実習② マダニ採集ツアー② (海ぼうず玄関集合)

実習③ i マダニ同定 指南：藤田博己

ii マダニ解剖 講師：矢野泰弘

39. マダニの身体測定 (形態同定への活用を目指して)

○門馬 直太 (福島県食品生活衛生課)

40. 国内に潜在する回帰熱群ボレリア

○高野 愛 (山口大学 共同獣医学部)

41. シュルツェマダニ (*Ixodes persulcatus*) の Rel/NF-kB 様因子の同定

○伊藤 幸枝 (山口大学 共同獣医学部)

シンポジウム 2 マダニ刺症の現状と対応に関する問題点

コメンテーター 夏秋 優・矢野 泰弘

42. マダニ刺症診療ガイドライン：たたき台の提案

○夏秋 優 (兵庫医科大学 皮膚科学)

リンク会報2

第24回リケッチア研究会プログラム

日時：平成29年12月2日（土）3日（日）

会場：国立感染症研究所 戸山庁舎 共用第一会議室（東京都新宿区戸山 1-23-1）

プログラム

12月2日（土）

- ・木下一美（国立感染症研究所感染症疫学センター）：臨床、疫学① 感染症発生病動向調査における「つつが虫病」と「日本紅斑熱」届出報告の検討
- ・大石沙織（静岡県環境衛生科学研究所）：静岡県で9月下旬から発生した日本紅斑熱5症例について
- ・和田正文（上天草総合病院）：紅斑が目立たず診断困難であった日本紅斑熱の死亡1症例
- ・夏秋 優（兵庫医科大学皮膚科学）：マダニ媒介性感染症におけるマダニ刺咬部の皮膚反応について
- ・山藤栄一郎（亀田総合病院、長崎大学熱帯医学研究所）：日本紅斑熱の第2選択薬
同：リケッチア症の診断に寄与する因子
- ・重見博子（福井大学）：リケッチア症診療の手引き作成と進捗の報告
- ・岩崎博道（福井大学）：「リケッチア症診療の手引き」に関する打合せ、意見交換
- ・小川基彦（国立感染症研究所）：コーヒー抽出物であるカフェ酸の重症熱性血小板減少症候群ウイルス（SFTSV）に対する増殖抑制効果
- ・小川基彦（国立感染症研究所）：リコンビナントつつが虫病リケッチア型特異的抗原(TSA)を抗原とした間接蛍光抗体法の血清診断法としての評価
- ・安藤匡子（鹿児島大学）：*Orientia tsutsugamushi* 7血清型のマウスに対する病原性比較

12月3日（日）

- ・藤田博己（馬原アカリ医学研究所）：*Rickettsia japonica* 媒介種再考
- ・佐藤寛子（秋田県健康環境センター）：秋田県のツキノワグマと刺咬マダニのリケッチア検索
- ・桐野有美（宮崎大学）：宮崎県の野生動物におけるダニ媒介性病原体調査
- ・竹田努（宇都宮大学）：鳥獣捕獲関係者のダニ感染症抗体調査結果
- ・笠間健太郎（九州大学）：非病原性リケッチア *Rickettsia* sp. LON のゲノム解析
- ・田井仁（静岡県立大学）：*Rickettsia* sp. LON の細胞内増殖評価法の検討
- ・高本直矢（静岡県立大学）：単為生殖がもたらすダニ内在性リケッチアへの影響
- ・佐藤綾香（静岡県立大学）：マダニ内に存在する細菌叢のメタ16S解析
- ・川端寛樹（国立感染症研究所）：情報 update、ダニ媒介感染症

リンク会報3

第10回日本リケッチア症臨床研究会プログラム

日 時：2018年1月6日(土)、7日(日)

会 場：滋賀県立県民交流センター・ピアザ淡海（おうみ）207 会議室

〒520-0801 滋賀県大津市におの浜1丁目1番20号

プログラム

1月6日(土)

- ① 山藤栄一郎（亀田総合病院、長崎大・熱医研）：日本紅斑熱における皮疹の特徴
- ② 薬師寺直喜（市立宇和島病院）：多形紅斑を呈した日本紅斑熱の1例
- ③ 白杉 郁（神戸大学医学部）：初診時よりPR3ANCA陽性となり鑑別困難であった日本紅斑熱の1例
- ④ 夏秋 優（兵庫医科大学）：兵庫県六甲山系における日本紅斑熱の現状
- ⑤ 笹本浩平（市立敦賀病院）：ツツガムシ病との鑑別に苦慮した日本紅斑熱の一例における臨床経過・抗体価の推移
- ⑥ 内川宗大（国保すさみ病院）：当院で経験した日本紅斑熱10例の検討
- ⑦ 川上万里（岡山済生会総合病院）：ウイルス感染症として治癒後に判明した日本紅斑熱の1例
- ⑧ 和田正文（上天草市立上天草総合病院）：日本紅斑熱の死亡症例の検討
- ⑨ 塚平晃弘（飯田市立病院）：遺残口器を病理確認しえたライム病の1例。感染症法施行以降（1999年～）長野県に報告されたライム病の発生状況
- ⑩ 中村 嗣（島根県立中央病院）：SFTSの一剖検例
- ⑪ 高田伸弘（福井大学医学部）：2014年の福井県初確認 SFTS も紅斑熱と同様に若狭湾岸東部に出た
- ⑫ 重見博子（福井大学医学部）：ウイルス性ダニ媒介感染症に対する治療のエビデンス再考

1月7日(日)

- ⑬ 山岸歩空人（伊勢赤十字病院）：日本紅斑熱発症前の、マダニ刺咬歴の検討
- ⑭ 川俣真由（伊勢赤十字病院）：日本紅斑熱後に肉アレルギーを生じた1例、日本紅斑熱発症後患者における肉アレルギーの検討

- ⑮ 寺前晃介（京都市立病院）：京都府における日本紅斑熱の発生状況
- ⑯ 森田裕司 森田貴久子（古座川町国保明神診療所）：日本紅斑熱の誤診例
- ⑰ 坂部茂俊（伊勢赤十字病院）：マダニ刺咬部周囲に発赤、腫脹を呈し、全身症状に乏しかったため TARI 様反応と考えたが後に *R. japonica* 抗体価上昇を呈し、4 か月以上血球減少が続く 1 例
- ⑱ 工藤祐樹（沖縄県立宮古病院）：沖縄県宮古島における、つつが虫病による初の死亡例 — 剖検所見を合わせて考察する —
- ⑲ 安西三郎（安西皮膚科）：ツツガムシ病の一例とツツガムシ刺症の一例
- ⑳ 成田 雅（沖縄県立中部病院）：Bloody killer” としての 11 月熱（タテツツガムシ媒介性つつが虫病）（速報）
- ▣ 木田浩司（岡山県環境保健センター）：岡山県のキチマダニから分離された Tarumizu tick virus の解析
- ▣ 馬原文彦（馬原医院）：マダニ刺咬によるアナフィラキシーショックの 1 例
「リケッチア症診療の手引き」 現状報告・検討会① 田居克規（福井大学医学部）
教育講演 『近年の感染症ガイドライン作成の傾向と実際』 関 雅文（東北医薬大）
「リケッチア症診療の手引き」 検討会② 岩崎博道（福井大学医学部）

「医学野外研究支援会」2018 年便り

- 趣 意 2012 年 2 月の設立趣意書を参照
- 名 称 医学野外研究支援会 (Medico-Field Study & Support ; MFSS)
- 世話人 高田伸弘：福井大学医学部および信州研究拠点（訪問や宿泊可）
高橋 守：埼玉医科大学、関東在住
山本正悟：宮崎大学医学部、九州在住
藤田博己：馬原アカリ医学研究所、四国在住
- 会 員 2013 年 4 月以降に定年を迎え本会に賛同される方
世話人のほか古屋、石畝、また賛助人（様々な共同、協力関係の方々）
- 事 務 事務は MFSS 信州研究拠点にて E-mail: acaritakada@rice.ocn.ne.jp
-

「ダニ類研究班」名簿（これまで集会に関わられた方々）

- A** 赤松達矢（馬原アカリ医学研究所）
安藤秀二（国立感染症研究所）
安藤匡子（鹿児島大学）
安西三郎（安西皮膚科）
- B** 馬場俊一（日本大学駿河台病院）
- C** 鎮西康雄（鈴鹿先端科学大学）
千屋誠造（前高知県衛生研究所）
- F** 藤曲正登（千葉県衛生研究所）
藤崎幸蔵（前鹿児島大学獣医学部）
藤田博己（馬原アカリ医学研究所）
福井貴史（千葉科学大学）
古屋由美子（前神奈川県衛生研究所）
- G** 御供田睦代（鹿児島県環境保健セ）
- H** 橋本知幸（日本環境衛生セ）
本田俊郎（鹿児島県立出水保健所）
呉 弘植（韓国；済州大学）
- I** 今内 覚（北海道大学大学院）
稲田貴嗣（神奈川県衛生研究所）
猪熊 壽（帯広畜産大学獣医学部）
石畝 史（前福井県衛生環境研究セ）
石井 明（実践女子大学生生活科学部）
磯貝恵美子（東北大学獣医学部）
伊東拓也（北海道立衛生研究所）
岩崎博道（福井大学医学部）
- K** 角坂照貴（愛知医科大学）
上村 清（丸三製薬KK）
粕谷志郎（岐阜大学地域科学部）
川端寛樹（国立感染症研究所）
北岡茂男（前農水省家畜衛生試験場）
狩生 徹（山口大学）
岸本壽男（岡山県環境保健セ）
川上万里（岡山済生会病院）
小林秀司（岡山理科大学）
北野智一（宮崎県食肉衛生検査所）
朽谷健太郎（亀田総合病院）
川森文彦（静岡県環境衛生科学研究）
- M** 馬原文彦（阿南市馬原医院）
増澤俊幸（千葉科学大学薬学部）
松村武男（前兵庫大学健康科学部）
松岡裕之（自治医科大学医学部）
三角仁子（埼玉医科大学）
水田英生（前大阪検疫所）
馬 曉航（中国；浙江大学）
森尾倫子（鳥取大学）
門馬直太（福島県衛生研究所）
馬原文彦（馬原医院）
森田喜久子（国保明神診療所）
- 森田裕司（国保明神診療所）
- N** 中嶋智子（京都府保健環境研究所）
中本 敦（琉球大学理工学研究科）
夏秋 優（兵庫医科大学皮膚科）
野田博明（農業生物資源研究所）
野田伸一（鹿児島大学多島圏研究セ）
- O** 大橋典男（静岡県立大学）
大迫英夫（熊本県保健環境科学研究所）
小河明美（大分県立病院）
小河正雄（大分県衛生環境研究セ）
及川陽三郎（金沢医科大学）
大滝倫子（九段坂病院皮膚科）
大竹秀男（宮城大学食産業学部）
- S** 清水慶子（岡山理科大学）
島津幸枝（広島県立総合技術研保環）
坂部茂俊（山田赤十字病院）
佐藤寛子（秋田県健康環境セ）
斎藤あつ子（兵庫医科大学薬学部）
鈴木 博（前長崎大学熱帯医学研究所）
- T** 竹之下秀雄（白河厚生総合病院）
多村 憲（元新潟薬科大学）
高瀬欽庸（馬原アカリ医学研究所）
田原研司（島根県庁）
高田伸弘（福井大学医学部）
高田 歩（静岡県立大学）
高橋健一（北海道立衛生研究所）
高橋 守（埼玉医科大学）
高野 愛（山口大学獣医学部）
高岡正敏（ペストマネージメントラボ）
- U** 内川公人（前信州大学医学部）
内山恒夫（徳島大学）
- W** 渡辺 護（前富山県衛生研究所）
和田康夫（赤穂市民病院）
和田正文（上天草市立上天草総合病院）
- Y** 山本徳栄（埼玉県衛生研究所）
山本正悟（前宮崎県衛生環境研究所）
山内健生（広島県立大学）
矢野泰弘（福井大学医学部）
米田 豊（久留米大学医学部）
吉田眞一（九州大学）

「ダニ研究」寄稿要領

1. 寄稿いただく著述は、ダニ関連分野にかかる提言、小論、随想などとする。
2. 原稿は MS ワードでの作成とし、書式は既刊の本誌に倣うのが簡便である。
句読点は、和文と英語句を読み分け易いよう「、。」を使用する。英文では「, .」。
3. 和文、英文共に学名はイタリック体とし、図表の印刷スタイルは編集部に一任、末尾に一括記載する文献の書式は「衛生動物」の執筆要領に準じる。
4. 原則としては著者校正は行わず、編集部ないし委嘱した専門家が当たる。
5. 送付方法はメール添付で下記の編集部宛とする。

acaritakada@rice.ocn.ne.jp (件名は「ダニ研究」と明記)

締切は毎年2月末。

編集後記

小誌は、編集のマン追加修正パワーと予算の都合で昨年から冊子体での発行をやめてPDF版とした上で、SADI ホームページの場に掲載する形としております。メリットとして、発行後でも必要なら追加や修正をでき、カラー版のページなども随意に増やせることが挙げられます。そのこともあり、今年はカラー画像を多用した記事を掲載してみました。その点は、ご興味をもってお読みくだされば幸いです。

以上、相も変わらずですが、国民の健康問題にかかる小さな受け皿として本誌をお届けします。

ダニ研究 13号

発行日 2018年6月1日

発行 日本衛生動物学会ダニ類研究班

事務扱 〒910-1193 福井大学医学部

Tel 090-8097-5533

e-mail: acaritakada@rice.ocn.ne.jp